

平成 29 年 8 月 8 日、9 日の 2 日間、私たち仙台二高一学年 100 名は、東大見学会・企業大学訪問に参加しました。今回の研修旅行は主に大きく四つの企画で構成されており、どの企画も私にとってとても刺激的なものでした。また、今後の進路選択のみならず、これから先の人生においても社会人になるうえで参考になるような、素晴らしい経験となりました。

その中でも、私の心に強く残っているものを 2 つ挙げます。

1、ディレクトフォースのグループディスカッションについて

まず、ディレクトフォース・笹川平和財団共催の夏季プログラム、特にその中のグループディスカッションは、私にとって有意義な時間になりました。このグループディスカッションは、各班に 1 人のかたが付いてくださり、各 20 分間お話を聞いたり、事前に生徒各自で用意してきた質問をしたりする、という内容でした。

私たちの班は、林茉里子さん、若松常美さん、菅原信夫さんから、貴重なお話を聞くことができました。

一人目の林さんは、以前ひろく移民や難民の支援に携わる仕事をされており、現在は笹川平和財団でアジア地域を対象として人物交流、人材育成などをおこなうプロジェクトに所属している方です。

林さんには、海外の大学に行くことについて、また海外で仕事をする事について話していただきました。日本の大学入試制度が自分には合っていないと感じた林さんは、高校在学中に留学し、イギリスの大学へ進学されたそうです。イギリスでは、大学は 3 年間、大学院では 1 年間と、日本とは違うシステムになっており、大学入試の準備よりも入った後の勉強のほうが大変だったそうです。大学では社会人類学を専門とし、移民が他国に行った先でどのような生活をするかを勉強したそうで、それがのちに移民、難民支援の仕事に従事するきっかけとなったそうです。私は、林さんに支援する側とされる側の関係について質問しました。やはり、支援する側とされる側には力関係があってはいけないとおっしゃっていました。そのためには支援する国の現地へ行き、ニーズの調査を事前しておくことが大事なのだそうです。しかし、自然災害など、支援される側が「今すぐ欲しい支援」は、調査をする時間が無いためにニーズに応えるのが難しいとおっしゃっていました。私の地元が東日本大震災で被災し、当時たくさんの支援を受けたときに、正直に言ってあまり必要としていなかったものがたくさん送られてきてしまったのは、それが原因であったのだと、そのお話を聞いて私は考えさせられました。

つぎにお話していただいた若松さんは、大手建設会社の役員をされており、一級建築士の資格を持ち、今も大型ビルをはじめとする建築をされているとのこと。私は、実際に建築をするときに、どのようなきっかけでアイデアが生まれるのかを質問しました。若

松さんは、何もないところからはアイデアは出てこず、多くの情報、知識、経験より湧き出るのだとおっしゃっていました。また、新しい発想の転換が必要であり、(1) 今あるものに付加価値を付ける (2) 異なった二つのものを足して 2 で割る (3) 全く違ったものを考える (例えば反対から見て考える、裏返してみる、壊してみる)、この 3 つが大切なのだということも、教えていただきました。

最後に、菅原さんには、留学に関することについて、詳しくお話していただきました。菅原さんは、学生時代に 10 か月間アメリカへ短期留学したことにより、海外での生活に対応できるという自信がついたのだとおっしゃっていました。その後企業に入社し、海外研修生として 2 年間はハーバード大学院に留学、ロシア語の勉強や地域研究を行い、社会構造などを勉強したそうです。また、企業の研修であったため、留学費用は全額免除されたとのことでした。ハーバード大学院では、自分のテーマを持った研究を行わなければならない、また、自由に選択できる授業が多いため、生徒に同じ顔触れがなく、学生間の交流はまったくと言っていいほどなかったそうです。そのほかにも SMS (ショートメールシステム) のワンタイムパスワードが日本で普及していないことなど、菅原さんの留学のお話を通して、海外の先進国と比較して日本にはまだまだ技術的に足りないところや遅れているところがたくさんあると感じました。

2、企業訪問について

私の所属していた班は、劇団四季の運営をする四季株式会社を訪問しました。班のメンバーは皆、将来の職業として芸術方面を希望しているものの、ジャンルが微妙に異なっているため、総合芸術としての劇団運営に携わる企業を訪問先に決めました。

今回私たちは四季株式会社の執行役員の近藤さんに社内の案内をしてもらい、また、劇団四季の歴史や企業理念などお話していただきました。

劇団四季はその名のとおり、演劇を行う劇団として来年で 65 年目を迎える、数ある劇団としては歴史の長い劇団です。立ち上げ当初、演劇界は政治的に訴える場であり、主義主張の強い劇しかなかったとのこと。それを四季の創立メンバーは憂いていて、劇場はお客さんに演劇を純粹に楽しんで帰ってもらう場所と考え、またそれが演劇のあるべき姿だ、という思想のもとに、日々お客さんを感動させて楽しませるエンターテインメントとしての演劇とはなにかを追求し、当時演劇界に一石を投じたといわれたそうです。

劇団四季の理念は

- ① 文化の東京一極集中の是正
- ② 演劇による経済的自立
- ③ 演劇の社会生活への復権

の三つで、①については東京に行かなければ演劇を観ることができないことの不公平を改善し、ちいさな子どもたちだけではなく、大人にも同じように機会を与えたいというものです。現在は全国ツアー公演の展開や、札幌、名古屋などの地方都市での劇場建設をおこ

なっているそうです。②について、ほとんどの劇団は劇団運営で団員の生活を賄うのは難しい現状があるなか、四季はチケットの売り上げのみでほぼすべての団員の生活を賄うことができているそうです。また、劇団四季では俳優のスター性に頼らず、演目で観客を集めることに力を入れているとのことでした。③については、以前演劇は社会生活とのかかわりが希薄だったため、一般のお客さんが近寄りがたかったことをふまえて、歌舞伎や能などの伝統芸能のように純粹に楽しめるものにしたいということだそうです。

今回、近藤さんのお話を聞いて最も印象的だったのは、「演劇を通して、こどもたちにこの世界は生きるに値するものだ、と伝えたい」という言葉でした。わたしも以前劇団四季の劇を観たとき、舞台装置や役者さんが体全体で幸せを表現している姿に感動した経験があり、それはこの言葉どおりの信念が届いたからだ、といま改めて感じました。現在小さなこどもをはじめとし、社会全体がストレスを多く抱えて、生きることに希望がもてない日本人が多くなっていることが心配されているように感じます。劇団四季のその姿勢は、今後の日本社会の救いになるような気がしました。

この2日間の研修を通して強く感じたことがありました。それは「プロフェッショナルは社会を動かす力を持つ」ということです。私は、大学への進学を志望していますが、それはただ漠然と良い就職先で働きたいからという理由によるものでした。しかし今回、日本の第一線で活躍されているかたがたの考えに触れて、私も同じように、何かのプロフェッショナルになりたい、社会に良い影響を与えられる人になりたい、と思うようになりました。この経験を記憶にとどめ、今後進路に向かうための努力をしていきたいです。